

論文の内容の要旨

論文題目 フェルディナン・ド・ソシュールの「一般言語学」
——原資料を読む——

氏 名 互 盛央

本論文は、フェルディナン・ド・ソシュール（1857-1913年）が1907-11年にジュネーヴ大学で三回にわたって行った「一般言語学」講義の全容を明らかにし、ソシュールの思考が最終的に到達した地点を提示することを目的としたものである。

ソシュールの二人の弟子シャルル・バイイとアルベール・セシュエは、師の没後、学生の聴講ノートなどの原資料を基に『一般言語学講義』（1916年）を公刊したが、講義の順序を保持せず、原資料にない文言を加筆するなどの問題があることは、1950年代後半以降の原資料の公刊を機に指摘されてきたとおりである。しかし、三回の講義のすべてを授業の順に読解する総体的な研究書は今日に至るまで出現しておらず、本論文はその欠落を埋めることをも企図している。

内容は、序章、本論三部六章から成る。

序章は、19世紀に誕生した言語学が端緒においていかなる意図を帯び、発展の過程でいかなる役割を担ったかを政治史的・思想史的に考察し、19世紀後半に言語学に携わったソシュールにとっての時代的背景を明らかにする。

言語学誕生の契機は、サンスクリットの「発見」である。サンスクリットに見出されたギリシア語、ラテン語との類似を近親関係と捉え、共通の起源から複数の言語が分化する過程が想定されたとき、「比較文法」としての言語学は始まった。「比較文法」という名称を初めて用いたのがフリードリヒ・フォン・シュレーゲル（1772-1829年）だったように、そこには起源としてのサンスクリットに卓越性を認めるロマン主義的発想がともなわれていたが、ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ（1762-1814年）に見られるとおり、近代的な国民国家としての統一に遅れをとったドイツ語圏において、その発想は起源に直結する正統な言語としてのドイツ語の卓越性をドイツ人の卓越性と同一視し、統一国家

樹立を正当化する論理を生み出した。正統な原典を確定するために複数の写本の「比較」を行う文献学から言語学が派生したのと同じ時期に同じ文献学から歴史学と法学が派生したのは、それゆえである。およそ半世紀のち、普仏戦争（1870-71年）に敗れたフランスが第三共和政の下で「単一にして不可分な共和国フランス」を確立するために言語政策を敷き、「フランス語を語る者はフランス人である」という観念を流布させることを可能にしたのも、それと同じ論理にほかならなかった。

その意味で、ソシュールが「フランス語を語る非フランス人」であるジュネーヴ人だったことは軽視できない事実である。比較文法を発展させた青年文法学派の中心地ライプツィヒ大学に留学したソシュールは「ドイツ的なもの」に嫌悪を抱き、『インド・ヨーロッパ諸語における母音の原初体系に関する覚え書き』（1878年）の出版後、1881年にパリ高等研究院の講師になった。しかし、当時は言語の優劣を国民の優劣、さらには「人種」の優劣にすり替え、反ユダヤ主義を正当化するために言語学が利用された時代でもある。同じ論理に従って言語学はフランスからジュネーヴ人の居場所を消去する。ソシュールがふいにもちかけられたコレージュ・ド・フランス教授就任に必要なフランス国籍取得を拒否し、1891年に故郷ジュネーヴに帰還したことと、1880年代後半に共時的なものを扱う「形態論」と通時的なものを扱う「歴史音声学」を別個に取り上げる授業形態に到達したことは無関係ではない。言語の通時態を語りうるのは言語の複数性を見ることを可能にする等質的時間に依拠した「歴史」ゆえであり、その「歴史」の中で言語は国家と同列の対象として並置される。しかし、共時態を語れば、「歴史」を抹消する時間性に直面せざるをえない。

帰還直後に行われたジュネーヴ大学就任講演で、その時間性は「言語の絶対的連続性」として提示された。今日語られる言語は常に昨日語られた言語と同じである。その事実は、言語から「同じ」と「異なる」の対を排除する〈同じ〉という様相を明るみに出す。〈同じ〉を司る時間性は、等質的時間としての「時間」と隔絶した〈時間〉である。ならば、言語学は「時間」によって現れる通時態と〈時間〉によって現れる共時態を同時に語りうるのか。言語学は総合できない二重性を総合するふりをしているだけではないのか。就任講演の直後、ソシュールはその問いに決着をつけるための「書物」を執筆する企てに着手した。『言葉の二重の本質について』と題された最初の試み以降、中断と再開の繰り返しにほぼ十年の時間が費やされたが、結局、公刊は実現せず、1900年頃からは方言や地名、ニーベルンゲンなどの伝説、アナグラムの研究がなされた。後世の者はそれを挫折した「一般言語学」からの逃避とみなしたりする。だが、原資料を丹念に読めば、「一般言語学」講義は挫折の再演であるどころか、一見無関係に見える研究を経たからこそ可能な試み、すなわち「時間」を自明視する19世紀の「言語学」を解体し、〈時間〉に依拠して共時態と通時態を総合する〈言語学〉としての「一般言語学」の試みを示唆してくる。

本論三部は、全三回の講義の各々にあてられる。ソシュール自身の準備ノートがわずかしか現存しないため、最も詳細な記述を残したアルベール・リードランジェ（第一回講義、第二回講義）、エミール・コンスタンタン（第三回講義）の聴講ノートが主たる読解の対象となるが、聴講ノートはあくまで間接的な資料であり、初学者が多数を占めていたための配慮や逡巡、妥協や問題の回避が混入している。それゆえ、他の聴講生による記述との異同を十全に考慮した読解が不可欠である。

第一回講義（1907年）は、歴史音声学を扱う第一部だけで終わり、共時態を回避した。だが、言語の変化の要因として提示された類推を扱う際、単位画定のメカニズムに言及したソシュールは、一時的に共時態に足を踏み入れる。そのとき提示された「半無意識」、「下意識」は、1890年代の草稿で

明言された「語る主体」の意識という単位画定の「基準」を示すものである。類推とは共時態のメカニズムそのものであり、それを可能にする言語を司るのが連続性である以上、伝統的に変化の要因とされてきた類推を扱うことを余儀なくされる「一般言語学」講義では共時態を回避できない。最初の「一般言語学」講義は、その事実をソシュールに突きつけてきた。

第二回講義（1908-09年）は、それゆえ共時態と通時態をともに扱う「序説」を前半に置いた。共時態の導入とともに示されたのが「社会制度」としての言語という見解である。それはアメリカの言語学者ウィリアム・ドワイト・ホイットニー（1827-94年）が提示したものだが、ホイットニーはいまだ「自然」にとらわれていた。言語を社会制度として考察すれば、徹底した「反自然」としての社会性が現れる。言語単位を「価値」として捉え、体系による価値と社会的協定による価値を「同じもの」と断じるソシュールにとって、その社会性は連続性としての〈時間〉と一つになる。しかし、その共時態の本質を明らかにすれば、「言語学」は否定されるほかない。だから、第二回講義は連続性を回避し、共時態と通時態は〈同じ〉と「異なる」の対から「同じ」と「異なる」の対にすり替えられた。観察者は通時態しか観察できず、共時態はその向こう側に想定される。だから、通時態を排除すれば共時態はないが、通時態を保持すれば共時態は現れない。だが、言語学史を扱うもう一つの「序説」を後半に置いたソシュールは、その準備ノートに「民族（国民）不在のヨーロッパ」という語を記した。連続性の中では民族や国民は無化される。通時態を排除することなくその事実を保持しようと試みるとき、講義は伝説研究と合流する。ジュネーヴを都にしたブルグント族に関わるニーベルンゲン伝説の研究は、「歴史と伝説」を「真実と虚構」の対とみなす通念を打ち砕き、「ドイツ的なもの」に回収されたニーベルンゲン伝説を「民族（国民）不在のヨーロッパ」に奪還する試みとなる。

第三回講義（1910-11年）は、その伝説研究の総決算と同時期に開始された。第一部「諸言語」は、地理的多様性を取り上げ、「近親性の中の多様性」と「認識可能な近親性なしの多様性」を区別する。後者は「言語の起源」の問題にほかならないが、18世紀に頂点を迎える「言語起源論」の歴史は、それが「国家の起源」の問題でもあったことを示している。その問題に答える役割は、19世紀には「言語学」が担った。しかし、講義は「郷土の力」と「交通の力」を提示し、後者が「移行の感知不可能性」、すなわち連続性として現れることを明言する。「交通」の中では「真実と虚構」の区別は無効にされる。三回の講義で一貫して批判されてきた文字言語が仮構する「歴史」ではなく、連続性の中で語られる〈歴史〉を語る試みがそこに現れる。第二部「言語」は、他の記号との関係を捨象した言語記号を出発点に据えた。それは徹底した「反自然」である恣意性を「偶然性」に置き換えることにほかならない。当初の計画では、そこから記号体系としての言語に移行することで、「時間」から〈時間〉に移行しようとしたソシュールは、しかし講義のやり直しという大胆な決断を下した。それは〈同じ〉言語の通時態を語る決断だった。その試みは「記号の意味」と「辞項の価値」の区別に行き着く。「価値」は肯定的辞項なき差異の領域に見出されるが、実在化されれば「肯定的辞項に類似しうる何か」としての「意味」に転化する。だから、「同じ」を受容しつつ〈同じ〉を護持すること。そこに〈言語学〉としての「一般言語学」の可能性があることを、最後の「一般言語学」講義は示している。